

看護学基礎カリキュラムにおける基礎ゼミナールの試み

東 亜紀, 木部 美知子, 入江 多津子, 佐藤 みつ子

了徳寺大学・健康科学部・看護学科

要旨

本研究報告は、学生の基礎ゼミナールでの実践を取り上げ、その意義と課題を明らかにすることを目的とした。対象は本学看護学科の1年生であり、育成効果は、学習行動目標の自己評価から読み取った。その結果、学生はゼミナールの活動を通じて自己成長を感じ取っていることが示唆された。

キーワード：看護基礎教育、社会人基礎力、プログラム評価、

Evaluation of the Basic Seminar in the Nursing Sciences Basic Curriculum

Aki Higashi, Michiko Kibe, Tazuko Irie, Mitsuko Sato

Department of Nursing, Faculty of Health Sciences, Ryotokuji University

Abstract

This research report refers to practical study in the basic seminar, and is aimed at clarifying the meaning and subject of that study.

The objects of this research are first year students of the Ryotokuji University Nursing Department who study nursing science, and the educational benefit was evaluated using in the students' self-evaluations of study goals.

The results suggest that students achieve self-growth through the activities introduced in the seminar course.

Keywords : Nursing basic education, Basic ability to work in society, Program evaluation

I. はじめに

看護学科では、本学が掲げる「医療と芸術の融合」を基本理念とし、日本固有の美や和の精神ももとに豊かな人間性と高い倫理観を備え、看護のアートとしての創造性や豊かな感性を養い、看護の専門的な知識（サイエンス）・技術（アート）・態度（ハート）を身につけ、看護学の発展および保健医療福祉に貢献できる人材を育成することを教育目的としている。

この「保健医療福祉に貢献できる人材」を育成する教育目的は、全学に共通するものであり、1年次から4年次まで体系的なカリキュラムが構成され、それに並行し1年次には、初年次教育も行われている。

初年次教育とは、「高校（と他大学）からの円滑な移行を図り、学習および人格的な成長に向けて大学での学問的・社会的な諸経験を“成功”させるべく、主に大学新生を対象に総合的につくられた教育プログラムである」と定義されている¹⁾。初年次教育は、1990年代後半の18歳人口の減少の中で、多くの大学で多様化した学生が入学するようになった「ユニバーサル化」に伴い、近年では、学士課程教育を有効に機能させる教育プログラムに位置づけられ、多くの大学で取り組まれている。初年次教育の目的は大学に

よって多様であるが、共通するのは「受動的な学習態度から能動的で自律的・自立的な学習態度への転換」である²⁾。

本学看護学科では、学生の能動的で自律的・自立的な学習態度への転換は、一方的な講義ではなく、学生教員間の双方向的な継続的な協働活動の中で実現するとし、初年次教育プログラムとは別に、「看護学科ゼミナール」を開講した。ゼミ形式の場を4年間連続させることで、学生の自律・自立化を目指すものである。図1は、学士課程における看護学科ゼミナールの位置づけをモデルに示すものである。

本稿は、1年次前期に実施した基礎ゼミナールの試みに関する教育実践報告である。

II. 研究目的

学生の基礎ゼミナールでの実践を取り上げ、その意義と課題を明らかにすることを目的とした。

III. 研究方法

1. 対象者 本学看護学科の1年生103名のうち、口頭で承諾のとれた学生8名

2. 方法

1) 看護学科ゼミナールの概要

(1) 対象プログラム

基礎ゼミ（単位化はされていない）

(2) 時期

1年次前期

(3) 形態

1グループ10～11名で編成し、各グループに教員1名が担当した。

(4) 内容

ゼミの基本要素は、グループディスカッションを含むことにした。表1は、全7回の内容である。1回目は学生がグループメンバーとグループ学習に慣れることを狙い、2回目では、文献検索の方法の確認をした。3～5回目では、学生が設定したテーマについて深め、6回目で口頭発表をした。

(5) 社会人基礎力³⁾

本学看護学科の教育目的である「保健医療福祉に貢献できる人材」の育成には、社会人基礎力でいう「前に踏み出す力（アクション）」、「考え抜く力（シンキング）」、「チームで働く力（チームワーク）」を対応させ、プログラムを作成した。

社会人基礎力とは、経済産業省が定めた「人が社会で生きて行くのに必要な基本的な力」のことで、3つの能力と12の能力要素からなる。今回のプログラムでは、能力要素を看護学科の学生に理解しやすい言葉の一部を置き換えた（表2）。

2) 効果の検証

社会人基礎力の育成効果は、全4回のグループワークの前に、評価シートで自己評価と自由記載の振返り、グループワーク後に、同様の評価シートで自己評価と自由記載の振返りを実施した。

3. 倫理的配慮

ゼミ学生8名に対し、口頭で研究目的及び方法の説明をし、同意を得た。

表1 基礎ゼミプログラム（1年次・前期）

		前期	内容	手段
4/7	1	イントロダクション	基礎ゼミの全体説明(目的・進め方など) 自己紹介と他己紹介 ゼミリーダーの選出と連絡網の作成	
4/21	2	図書館でレポートを書こう	情報検索と文献情報の読み方	図書館司書担当
5/12	3	グループワーク①	テーマの設定	各教員ごとに設定
5/19	4	グループワーク②	情報の検索・情報を読み解く	
6/16	5	グループワーク③	プレゼン内容のグループ討論・まとめ	
7/14	6	グループワーク④	プレゼンテーション	
7/28	7	前期試験への取組み 国家試験への取組み	定期試験についての注意 国家試験ガイダンス	定期試験:各教員担当

表2 看護学科における社会人基礎力の能力要素の意味

分類	能力要素	能力要素の意味
前 に 踏 み 出 す 力 (ア ク シ ョ ン)	主体性	物事に進んで取り組む力 自分の知識や能力を向上させるため、自らの意志で積極的に学習を進め、グループワークに取り組むことができる力
	働きかけ力	他人に働きかけ巻き込む力 グループメンバーや教員など、周囲を巻き込んで学習を進めることができる力
	実行力	目的を設定し確実に実行する力 グループワークの課題に最後まで取り組む力
考 え 抜 く 力 (シ ン キ ン グ)	課題発見力	現状を分析し目的や課題を明らかにし準備する力 現状を正しく認識するための情報収集や分析ができる力
	計画力	課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力 作業に優先順位をつけ、実現する計画が立てられる力
	創造力	新しい価値を生み出す力 複数のもの(考え方や技術など)を組み合わせて、新しいものを作り出すことができる力
チ ー ム で 働 く 力 (チ ー ム ワ ー ク)	発信力	自分の意見をわかりやすく伝える力 グループメンバーや教員との話し合いの場面で、自分の意見を論理的に整理し、相手が理解しやすいように反応を見ながら伝えられる力
	傾聴力	相手の意見を丁寧に聴く力 相手が話しやすい雰囲気を作り、相手の話を素直に聴くことができる力
	柔軟性	意見の違いや立場の違いを理解する力 相手の気持ちや相手の意見を受入れることができる力
	状況把握力	自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力 自分の役割を把握し、グループ内で最適な行動をすることができる力
	規律性	社会のルールや人との約束を守る力 相手に迷惑をかけないよう、守らなければならないルールや約束を実践できる力
	ストレスコントロール力	ストレスの発生源に対応する力 ストレスの原因を見つけ、自力で、または他人の力を借りることにより取り除くことができる力

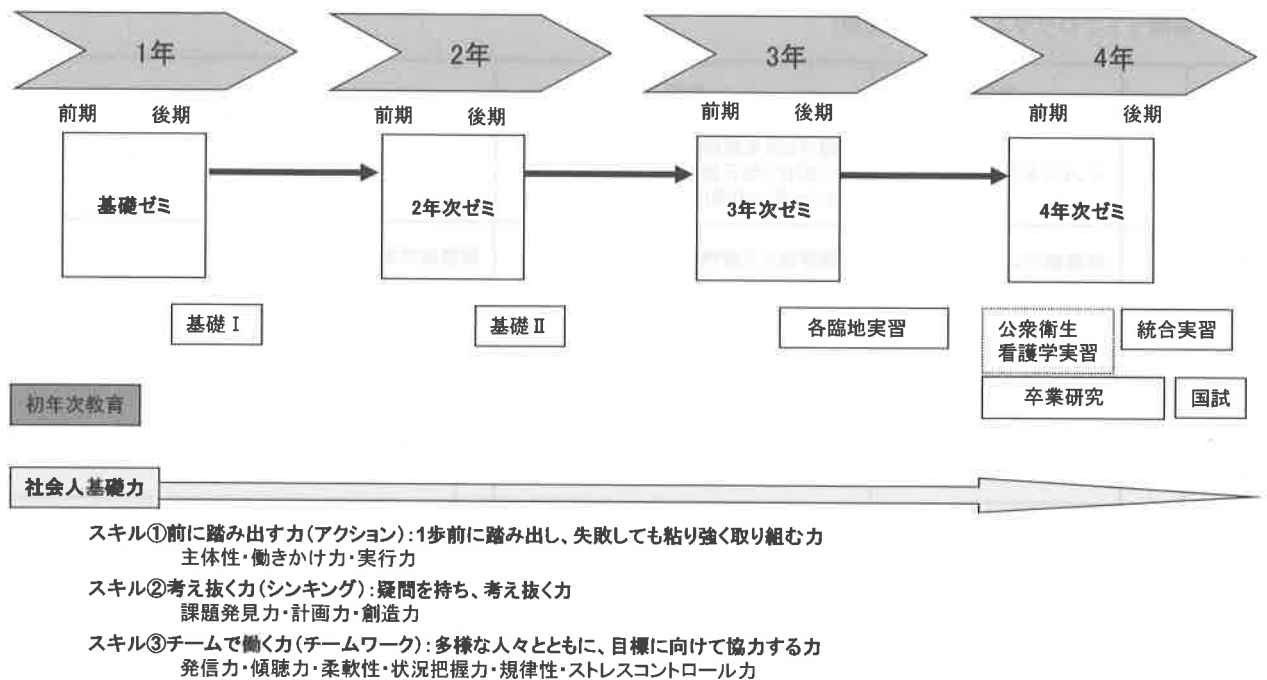


図1 看護学科のゼミナール

IV. 結果

1. 社会人基礎力の育成

(1) 学生の自己評価による結果

表2に示した「前に踏み出す力(アクション)」、「考え抜く力(シンキング)」、「チームで働く力(チームワーク)」について、グループワーク前後の評価シートから読み取った(図2, 3, 4)。X軸は、グループワークの前後を示している。Y軸は、3段階評価で、レベル1:発揮できなかった(どうしてもできなかった)、レベル2:通常の状態では発揮できた(何とかできた)、レベル3:通常の状態でも効果的に発揮できた(見事にできた)・困難な状況でも発揮できた(とても難しかったが何とかできた)である。

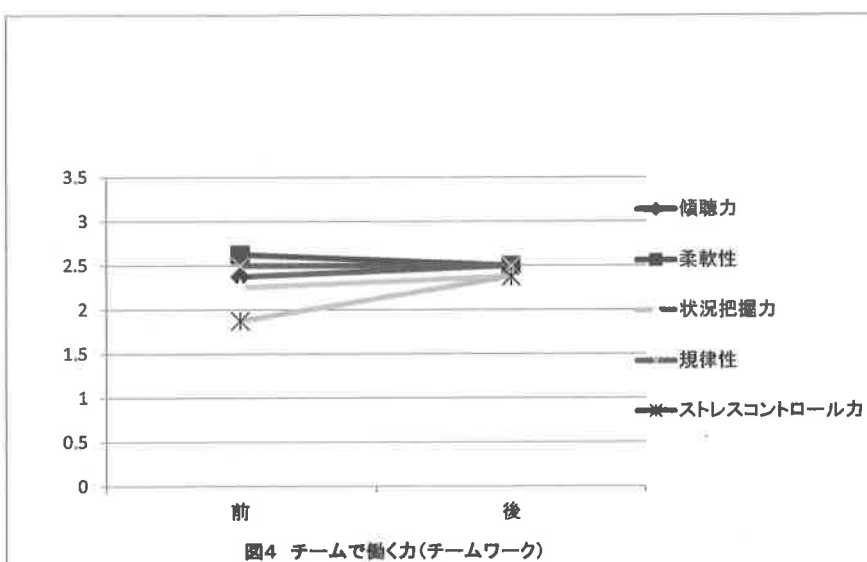
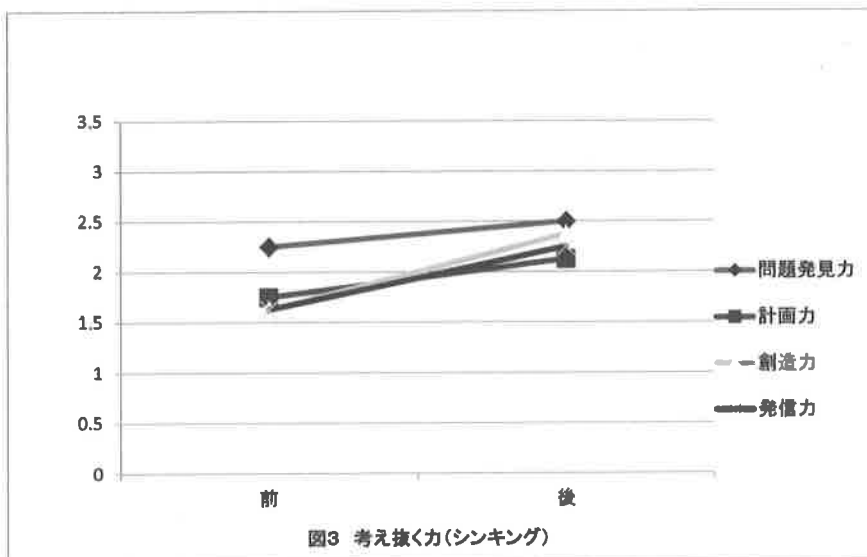
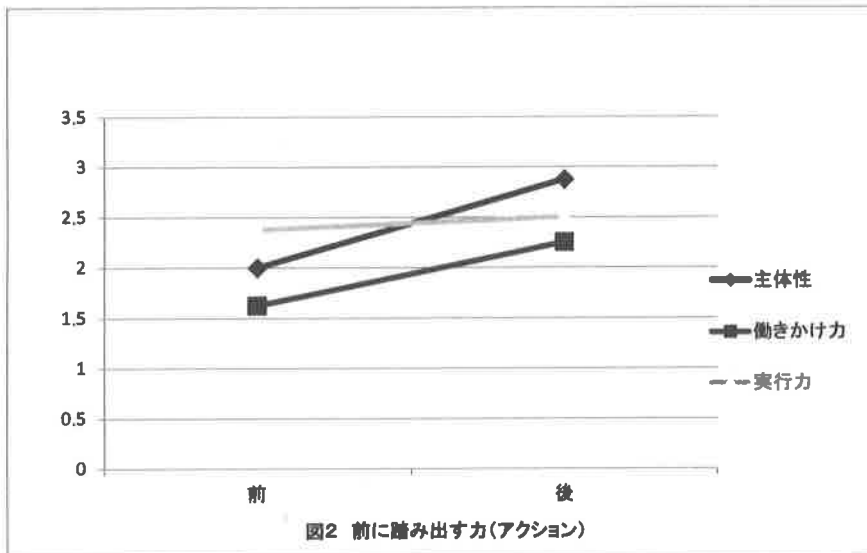
学生は、「前に踏み出す力(アクション)」、「考え抜く力(シンキング)」、「チームで働く力(チームワーク)」ともに、基礎ゼミのグループワークを通して向上している。

しかし、「前に踏み出す力(アクション)」、「考え抜く力(シンキング)」の向上に比較すると「チームで働く力(チームワーク)」の向上は要素によって異なり、能力要素「柔軟性」では、グループワーク前より後の方が低下している。

(2) 学生の具体的行動事実

学生には、評価シートにおいて、グループワーク全体を通して自分の行動を振り返り、当初はできなかったことができるようになったことなど、自身の成長を具体的に記載してもらった。

「前に踏み出す力(アクション)」に対しての記述では、自分から「こうしよう!ああしよう!」などと投げかけられた。最初はなかなか、自分の意見を言ったりすることができなくて上手くまとまらなかったが、ゼミの時間を重ねれば重ねる度に自分に自信がついた。ゼミでは先頭になってやる事ができた。最後までやれてよかった。自分から「あーしよう、こうしよう」と言えたので我ながら驚いた。などであった。



「考え抜く力（シンキング）」に対しての記述では、調べることで考えられた。計画通りに進んだと思う。メンバーと協力して様々な方法で調べることができた。焦らず楽しく取り組めた。などであった。

また、「チームで働く力（チームワーク）」に対しての記述では、一緒にまとめることも調べることができたのでいい発表ができた。相手の意見を聞くことができた。分担してできた。チームで働くってとても楽しいなと感じた。高校卒業以来、みんなでひとつの目標に向かっていくものがなかったから、久しぶりに熱くなれた。などとあげる学生がいる一方で、自分では進んでやろうと思ってもグループの人と協力してやるのが出来なかった。みんなで話し合うことをしなかったので、自分の意見も伝わらないし、相手の意見も伝わってこなかった。まとめるのを任せてしまった次は気をつけたい。という記述があった。

V. 考察

看護学科ゼミナールの1年前期に実施した基礎ゼミプログラムにおいて、学生は、社会人基礎力である「前に踏み出す力（アクション）」、「考え抜く力（シンキング）」、「チームで働く力（チームワーク）」に自己の成長を経験していた。これらの経験は、学生の自律・自立化を促すことにつながるものである。

「社会人基礎力」の特徴のひとつは、個人としての能力や課題に取り組むための能力に加えて、「チームで働く力」が柱となっている⁴⁾。グループディスカッションを含むゼミは、学生が他人に対し自分の意見を伝え、他人に働きかけ協力を得なければならない場となっていた。「チームで働く力」を育成することは、チーム医療における看護職者の役割や責務について考えていく助けになると言えよう。

なかでも特筆すべきは、学生の「チームで働く力（チームワーク）」に対しての記述で、グループワークがうまく運営できなかった事実から、事実に向き合い、自分に向き合い、次につながる具体的な行動へ向かい、「学生の自律・自立化」がなされたことである。グループワークが上手く運営されればまた、「学生の自己の成長の自覚」が喜びにつながっていることも伺える。学生による振り返りと自己評価は、どのような活動においても、また、どのような結果においても、学生の体験となり、体験から学びを引き出していたと言えよう。

また、「社会人基礎力」は能力概念ではあるものの、「3つの力、12の能力要素」として概念を言葉で明示化していることで、教育の中で教員が学生へ働きかける際の意識化や、学生にとっての自己確認など、オペレーション（操作）ツールとしての機能も持つ⁴⁾。社会人基礎力の育成を有効にするには、学生と教員の双方向の会話の流れが必要であると言える。

1年次前期の基礎ゼミプログラムでは、全4回と回数は少ないものの、期間が4月から7月にかけて実施された。この間、教員は学生の状況を理解し、適切なフィードバックや聴く、承認、といった技術を使い助言をすることで、学生のやる気を引き出し、行動を加速させる働きかけがあったと思われる。

しかし、教員がツールをどのように使用するかによっては、「社会人基礎力」の育成を妨げる場合もあると言える。学生の体験内容は、個々により受けとめ方が異なっている可能性があり、学生の体験からの学びに幅があることは否めないからである。

今後は、より効果的に社会人基礎力が育成されるよう、基礎ゼミの運営方法を検討する必要がある。また、学生と教員間での学びのコミュニケーションの場づくりとしては、基礎ゼミを運営する教員の教育的配慮が必要である。さらに、担当する教員間でできるだけ差が出ないよう、可能な範囲で教員間での基礎

ゼミプログラム交流などFDの要素を含む取組みも重要だと考える。

VI. 研究の限界と今後の課題

今回の結果は、対象となった学生に限定されることであり、また、対象数の少なさから一般化するには限界がある。また、基礎ゼミは、1回生における新たな試みでもあった。来年度は、新カリキュラムが運営される予定であり、学生が希望する職種が複数で卒業要件単位数が増加する場合、時間の確保が課題となる。

今後は、看護学科の学生に必要な自律・自立化を目指すプログラムの開発も検討していきたいと考えている。

文献

- 1) 中央教育審議会大学分科会（2008）学士課程教育の構築にむけて（審議のまとめ）。
- 2) 河合塾編（2010）初年次教育でなぜ学生が成長するのか－全国大学調査からみえてきたこと－,東信堂, 2.
- 3) 経済通産省（2010）社会人基礎力 育成の手引き－日本の将来を託す若者を育てるために, 朝日新聞出版.
- 4) 経済通産省（2010）社会人基礎力 育成の手引き－日本の将来を託す若者を育てるために, 朝日新聞出版. 4.
- 5) 経済通産省（2010）社会人基礎力 育成の手引き－日本の将来を託す若者を育てるために, 朝日新聞出版. 286.

（平成23年11月30日稿）

査読終了年月日 平成23年12月19日